私は将来、高齢者

中　三

「ばあば、次これやりたい。」
はしゃぎながら塗り絵を持っていく。幼い頃、私はいつもそうしていた。折り紙もあやとりも、全部祖母から教わった。思い返せば、ずっと私は祖母と一緒だった。あの笑顔と、大きな手で私のほっぺをプニプニと触ってくる祖母のことが、たまらなく好きだった。
毎朝、祖母と散歩に行くのが好きだった。大きな手で、優しく私の手を握ってくれた。あの木の名前は「イチョウ」だとか、この花の名前は「カーネーション」だとか、そういう日常的な会話が、何よりも楽しかった。
毎日、祖母が保育園の送り迎えをしてくれた。みんなと鬼ごっこをしたとか、先生に、「お洋服可愛いね。」って言われたとか、その日の出来事を何から何まで祖母に話すのが楽しかった。
ご飯を作るのも洗濯をするのも祖母だった。祖母の作るご飯は格別に美味しかった。洗濯物もふかふかで、思わず飛び込みたくなった。祖母の手はしわしわだったけれど、誰よりも強くて、かっこいい手だった。私は祖母が大好きだった。
「いつまでだっけ。ばあばとずっと一緒にいたのって。いつからだっけ。ばあばのことが心配でしょうがなくなったのって。」
祖母の作った味噌汁がしょっぱかった。前にテレビで見たことがあったけれど、私は「祖母が、いや、まさかな」と思った。
「これなんか味、おかしくない。ちょっとさすがに食べられないや。」
母が箸を止めた。「私も」と思い、食べなかった。そのときの祖母の悲しげな顔は忘れもしない。
ある日の夕方、外は大雨だった。学校から帰ってくると、私は目を疑った。
「なんで洗濯物、干しっぱなしなの。」
急いで家に入って洗濯物を取り込んだ。祖母が私のところにきて謝ってきた。
「あらごめんね。すっかり忘れてたわ。」
もちろんわざとではないことは分かっている。しかし思わず私は、
「どうしてできないの。明日学校に持っていくジ

ャージないんだけど。」
と怒鳴ってしまった。祖母は、
「ごめんね。」
と一言だけ言って夕飯の準備に戻っていった。
怒っちゃだめ。怒っちゃだめ。何度も自分に言い聞かせたけれど、今まで当たり前にこなしていたことができなくなっていく祖母のことが信じられなくて、信じたくなくて、冷たい態度をとるようになってしまった。
先日、いつものように学校から帰ると、普段仕事が忙しくて夜遅くにしか帰ってこない母が、険しい表情でソファに座っていた。
「あれママ今日早いね。どうしたの。」
母の言葉を聞いて、私は衝撃を受けた。
「ばあば、車で買い物に行く途中事故に遭ったって。救急車で運ばれて今病院にいるらしいから、今から病院行くよ。」
なぜ祖母が。まだ頭が追いついていなかった。怪我の具合はどうなのか。どれくらいの事故だったのか。とにかく心配だった。
病院に着くと、祖母がいた。幸いにも、大きな怪我ではなかった。私が手を振ると、
「来てくれたの。嬉しいわ。ありがとうね。ばあば初めて救急車乗っちゃった。ちょっと楽しかったな。」
と祖母は笑顔で応えてくれた。うそつき。本当は怖くて不安だったくせに。しかしそういうところも含めて、祖母は優しいのだなと改めて感じた。
祖母は一週間だけ入院することになったが、その一週間は本当に大変だった。ご飯や洗濯は自分でやらないといけないし、学校だって習い事だってこなさなくてはならなかった。そのとき初めて祖母のありがたみに気付いて、思わず涙があふれた。祖母は私が幼いときから、家事が忙しいのにもかかわらず、親が仕事で忙しくてなかなか帰って来られず、兄弟もいない私が寂しい思いをしないようにと、一生懸命育ててくれた。それなのに私は、いろんなことがだんだんできなくなってきて落ち込む祖母の気持ちも考えずに、ただ怒ることしかできなくて、なんて弱い人間なのだろうと思った。
祖母が退院した日、私は祖母と抱き合った。そして昔のように手を繋いだ。あのとき大きいと感じた祖母の手は、とても小さかった。しかし、あ

のとき感じたかっこよさは、まだまだ残っているようだった。私の自慢は私の祖母だ。

物忘れや判断力の低下、高齢になるにつれできなくなることは増えていく。私もいずれそうなっていくのだろう。しかしそれは、今まで一生懸命生きてきた努力を次の世代へ受け継ぐための、あって当然のことなのではないだろうか。

今の私たちにできることは、努力を受け継ぐ際に起きるトラブルに腹を立てるのではなく、そのトラブルを高齢者も大人も子供も関係なく、共に乗り越えていくことのできるような社会を創ることだと私は考える。なぜなら、私も将来、次の世代の人々に努力を繋げる高齢者になるのだから。